タジキスタンとウズベキスタンの政治的イスラーム

北川誠一

1. 概要

タジキスタン・イスラーム再生党は、イスラーム的政治を実現させるための目的を持つ政治結社として出発したが、内戦（1992-1997）におけるカラテギン地方閥、アフガニスタンのモジャーヘド軍閥やターリバン政権との関わりを経て、1997年の和平合意によって民主・イスラーム同盟全体で30%の閣僚ポストを保証され、現在では合法的議会主義政党として民主的手段によってその目的を実現させようとしている。しかし、現在のところ議会内多数を得る可能性はなく、彼らの存在が合法である以上の成果をもたらしているとは言えない。イスラーム解放党との関係は、お互いの存在を認めている。

世俗的タジキスタンに対して、ウズベキスタンは憲法においてイスラーム的価値を主張しているが、それはイスラームの文化的側面や個人的信仰に限定されており、所謂イスラーム政党は禁止され、議会内外に合法的代弁者をもたない。この結果ウズベキスタンにおける政治的イスラームは直接民衆に働きかけている。ウズベキスタン・イスラーム運動は武力において旧共産党につながる現政権を打倒し、原理主義的イスラーム国家を樹立しようとする組織であった。同組織は2001年に発展的に解消し、トルキスタン・イスラーム党が結成され、対象地域を中央アジア全域に拡大したが、同年末にアフガニスタンで壊滅的打撃を被り、党首ナマンガニも死亡した。イスラーム解放党は、平和的手段によって民族的国境に細分されない全イスラーム共同体を単一のカリフのもとに樹立する目標を持つが、選挙や議会などの民主的手続きは否定している。体制の変革を目指しているという理由で、ウズベキスタンでは厳しく弾圧されている。

識者の多くはウズベキスタンを含む中央アジアにおけるイスラーム主義の台頭をソ連崩壊後の社会生活全般の混乱と結びつけ、民主的社会の実現に解決の道を求めている。

2. 緒言

今日のウズベキスタンとタジキスタンは、ロシアによる併合・保護国化以前にはブハラ・ハン国とコーカンド・ハン国の領土であったが、ロシア革命後の民族性および民族国家領域の確定までは、ウズベク語とタジク語を併用しつつ、今日の国家領域とは重ならない幾つかの地域的文化圏を形作っていた。この文化圏は、全体ではカザフ人キルギス人の文化圏、トルクメン人の文化圏と区別される。現在のウズベキスタンのイスラーム信仰や政治的イスラームの諸問題を考察するにあたっても、歴史的に形成されたウズベク・タジク文化複合体と、その内部の地域的文化圏の両者の存在を視野に入れ、対比的に分析すれば、問題点がより明瞭になると考えられる。この報告では、まずタジキスタン・イスラーム再生党の活動を回顧し、ついでウズベキスタン・イスラーム運動、イスラーム解放党の活動の経緯・現状について言及し、最後にウズベキスタンにおける政治的イスラーム拡大の原因について私見を付した。

3. タジキスタン内戦とタジキスタン・イスラーム再生党

1）タジキスタン内戦

タジキスタンでは、1990年2月12日アルメニア人避難民に対する住宅供与の噂に激こうした住民が起こした暴動が、一連の騒乱の始まりとなった。この時、群集を前にして、タジク共産党本部前広場で状況の説明をしようとしたマフカモフ Kakhar Makhkamov 党第一書記が何者かに狙撃され、警備陣との打ち合いで死者5人を出す事件になった。さらにこれは市内で多数の死傷者を出す騒乱に発展、共和国最高会議の建物前でのデモ・集会が継続したが、政府は5000人の軍隊を導入して解散させた。この集会の要求の中には牛肉と偽って豚肉を売る商店の閉鎖、モスクの建設、タジク人名のロシア化停止などの民族文化にかかわる事項が含まれていた。同年最初の大統領選挙が行われたが、共産党の強力な巻返しが成功し、マフカモフが当選した。翌1991年のモスクワ・クーデター未遂事件ではマフカモフはクーデターの支持を表明したが、大規模な反対集会がおこり、9月7日辞任に追い込まれた。大統領代行となったカドリッディン・アスロノフ Kadriddin Aslonov は共産党に活

動停止を命じたが、今度は逆に保守派の反撃にあって、ラフモン・ナビエフ Rakhmon Nabiev に更迭された。ナビエフは非常事態を宣言するとともに、共産党活動停止命令を取り消した。しかし、イスラーム再生党が中心のデモ隊が大統領府を圧倒すると、ナビエフは一転して非常事態宣言を取り消し、共産党を再び活動停止にした。11 月 24 日大統領選挙が実施されると、ナビエフは 58%の票を獲得して、イスラーム再生党、タジキスタン民主党などの推した、ダウラト・フドナザロフ Daulat Khudonazarov を破った。反対派は選挙を有効と認めず再選挙を要求したが、ナビエフはこれを拒否し、再び反政府運動が高揚した。1992 年 3 月反政府側の有力議員マスド・イクラモフ Masud Ikramov、野党ラストヘズ党の指導者ミルボボ・ミルラヒモフ Mirbobo Mirrakhimov などを逮捕した。この時点ではまだイスラーム勢力や地方閥は組織活動に入っておらず、紛争は共産党と民主主義者・民族主義者の間に起こっていた。しかし、3-4 月議会内の論争が切っ掛けになって反政府側のパミール出身者、カラテギン人、イスラーム政党支持者が首都ドシャンベに動員されるようになった。政府側もナビエフの出身地北部のレニナバド州や南部ではあるが政府支持者勢力が大きいクリャブ州など地方から支持者を動員した。政府支持者、反政府派の双方に武器が流れ出し、ドシャンベでは市街戦が始まった。しかし、モスクワ 201 機械化狙撃兵連隊の介入を切っ掛けにして、戦闘は停止、5 月国民和解政府の樹立が決定された。

しかし、この後にかえって紛争は深刻化し内乱に向かう。各地で武装集団が結成され、政府側と民主・イスラーム連合支持者の間で武力衝突が始まった。ナビエフ派では、サンガク・サファロフ Sangak Saforov のクリャブの部隊、サイドフ F.Saidov のクリャブ州ロカイ・ウズベク人部隊、マンスロフ Jomoliddin Mansurov のギサル人部隊が大きかった。またイスラーム・民主連合ではカラテギン州には、後に特別状況相となるズィイェイェフ Mirzo Ziyeyev の部隊があった。アフガニスタンからイスラーム再生党支持のモジャーヘディンの越境が始まり、マザレシャリフのウズベク人軍閥ドスタム Dostam 将軍部隊が政府側クリャブ人部隊に合流した。やがてドシャンベは全くの無政府状態になった。9 月ナビエフは、出身地のレニナバド（ホジェンド）に帰還、北タジキスタンは首都を中心とする南部の武力闘争から離脱・静観を始めた。イスラーム・民主側の主導権は、状況の激化に伴いラスタヒズ党、民主党、イスラーム再生党の三派連合からイスラーム再生党へ移動した。この間政府支持派ではクリャブとレニナバドが将来の権力共有について合意し、ロシア、ウズベク両政府の支持を受けて人民戦線を結成、人民戦線民兵部隊は、12 月ドシャンベを奪取した。

人民戦線はドシャンベで、カラテギン人や民主・イスラーム同盟支持者に対するテロを行ったが、このため戦線が南に拡大すると、カラテギン人、パミール人など 15 万人がアフガニスタンへ避難した。難民とともにアフガニスタンに下ったイスラーム再生党は、サイド・アブドゥロ・ヌリーの指導下に亡命政府を樹立し、ムジャヘディンの援助を得てアム川支流ピャンジ川を越境して、人民戦線側およびロシア国境軍を攻撃した。1993 年アフガン正規軍に援助された民主・イスラーム側部隊が徐々に成果をあげ、ナビエフを援助するロシア国境警備隊に対する攻撃も相次いだ。この間にタジキスタン南部の経済と社会基盤は破壊され、数万人の死者と避難民 77 万 9 千人を出すに至った（加藤九「タジキスタンの内戦 1989 年-1996 年 2 月」『民族の共存を求めて (1)』北海道大学、1996 年）。

1996 年、イスラーム再生党はカラテギン渓谷から、政府軍を追い出し、シャリーアを実行した。住民は毎日 5 回の礼拝を強制され、女性は目だけをだすベールの着用を命じられ、酒類とタバコの販売は厳禁された。違反者の処罰はモスクで行われ、喫煙者 20 回、飲酒者 40 回、姦通 100 回手榴弾投擲機具で打たれた（Rotar',Igor,*Pod zeljonym znamenem Islama*,Moskva,2001p.65-6）。

1994 年以降ロシア政府はラフモノフに和解を勧めていたが、数年にわたる各国政府機関による調停と和平交渉の結果、1997 年和平合意が成立した。この結果反政府勢力は、閣僚ポストの 30%を確保することができた。数年間に及ぶ過酷な内戦にも拘わらずタジキスタン・イスラーム再生党は、和解後 2000 年の総選挙で共産党の 20%にも及ばない 7.5%の得票しか得ることができなかった。一方与党民族・民主党は、65%を確保した。ラフモノフ・ナビエフ大統領は、1999 年の選挙において圧倒的多数で当選（任期 7 年）したが、さらに 2003 年 6 月 22 日イスラーム再生党（ヌーリー党首）、社会民主党（ラフマトゥロ・ゾイエフ党首）等の反対を押しきり、国民投票を実施して任期を 2010 年まで延長した(*NG*,2003,4,21）。

2）タジキスタンにおけるイスラームの復興

1990 年の「良心と宗教的組織の自由」法発布後タジキスタンでは、1991 年には 10 校以上のマドラサ（中等専門学校の資格）、122 堂の金曜モスクが新設された。1992 年末までに 2,000 のモスクが開設された。別の集計では、1991-92 年に 126 の金曜モスクと 2,870 の祈祷所（Haghayeghi,96）が建設された。また 1990 年にはドシャンベにタシュケントのアル・ビールーニー高等イスラーム学院に継ぐ第二の学院が誕生した（Haghayeghi,*Islam and Politics in Central Asia*,New York,p.1995,97）。

このような中、イスラーム再生党 Partiya Islamskogo Vozrozhdeniya 結成大会は、1990 年 6 月 10 日アストラハンで ソ連全国から 150 人の代議員を集めて開かれた。タジキスタンからはオスマン Davlat Othman,ガドエフ I.Gadoev、ムッラー・ムハンマド・アブドッラー・ミールサイードフ（ヌーリー）ら 24 名が参加した。機関紙アル・ワフダット al-Wahdat（1991 年 1 月から）が刊行された。この党はシャリーアの実施や初等教育でのイスラーム教育の実施を要求しており、信仰としてのイスラーム以上のものを目標としていることは明白であった。タジキスタンでは 1990 年 10 月 6 日にアストラハン大会の出席者のオスマン Dawlat Othman,ガドエフらが支部を開設したが、ドシャンベでの創立大会は不許可になり、郊外で開催された。組織は 27 名からなるウラマー会議を持ち、ヒンマトフ Abdussamad Himmatov が議長に就任した。1991 年 10 月 26 日には共和国法務省により公認されたが、1992 年 12 月にはタジキスタン・イスラーム再生党 Hizb-e Nehzat-e Islami-ye Tajikistan として独立（Haghayeghi,87-88）した。

党綱領では、イスラームから政治経済を分離せず、独占、投機、高利を禁止、スンナ派ハナフィー派の教義理解を標準とする人道的民主主義を求めるとする（加藤）。これはシャリーアを強調はするものの近代主義的イスラームであって、宗教を全く心の問題であるとするロシア・ムスリムの主流よりは宗教的であるが、女性の隔離あるいはヒジャブの強制、体僕刑などは含まれていないので原理主義であるとは言えず、タジク人の民族性回復を主張し、ヒラーファットやイマーマットではなく民族的共和国を目標としているので、パン=イスラーム主義でもない。また、執行部自ら、繰り返しイスラーム国家の建設は非現実的であることを宣言している（Haghayeghi,p.88）。

メフルダード・ハガーイェギーは、タジキスタン再生党には 3 種のイデオロギーが混在していたとする。第 1 はワッハーブ主義で祝祭、通過儀礼、結納金（kalyam）、聖者崇拝などを非難した。代表はムッラー・アブドッラー・ミールサイードフ（ヌーリー）で、彼は宗教活動の容疑で 1986 年に逮捕された経歴があった。第 2 はムスリム同胞団のパン・イスラーム主義であり、第 3 は中庸な（moderate）イスラームであり、当時タジキスタンの大カーディーKazi Kalon であったトゥラジョンゾダ Akbar Turajonzoda が代表するが（Haghayeghi,89）、同党設立時は、イスラーム政党の創設は時期尚早であると反対している。何を持ってワッハーブ主義者とするかは、困難であるが、宗教儀礼の側面のみに関して、上記のようなムハンマドの時代にはない民衆イスラーム的要素を排除する信仰は、シャリーアの法源に関してコーランとハディースのみを採用するハンバリー法学派に見られるものである。正統派の一部を構成するハンバリー派と 18 世紀アラビアのネジュド出身のアブドゥルワッハーブとの違いは、民衆イスラーム的要素のイスラームを実行する人々をカーフィル（不信者）を弾劾するかどうかであろう。勿論特定の法学派の信者間の紛争ということは、起こることもあったが、体制的イスラームのウラマーもハンバリー派の存在自体を否定することはない。また、民衆的イスラームを実行するムスリムをカーフィルと糾弾したアブドゥルワッハーブも、彼自身が軍事的組織を糾弾することはなかった。

党はモスクを基盤に地方に勢力を拡大、主要な地方支部は北部ではレニナバド州の Mascha とウラテユベ UraTubeh、南部ではドシャンベおよび近郊、カラテギン Gharategin のガルム Gharm、ハトロン Khatlan 州のクルガン・テペ Ghotgan Tepeh であった。党員は 1990 年に 1 万人、1992 年に 3 万人、最大限 4 万人に達した（Haghayeghi,88）。ギサルやクリャブには地方支部がないことを注目しなければならない。（アハメド・ラシド『よみがえるシルクロード国家』坂井定雄・岡崎哲也、講談社、1996 年；小松久男「中央アジアのイスラーム再生」176-196 頁、小杉泰『増補イスラームに何がおきているか』平凡社、2001 年）

3) タジキスタンの地域主義とイスラーム

タジキスタンのイスラームを考察する場合、社会、政治生活の全体におけるものと同じく、地域間問題を無視することができない。内戦直前のタジキスタンでは、無神論者が強いレニナカン（ホジェンド）、シーア派の異端イスマイール派の多いゴルノ・バダフシャン以外の、カラテギンやクリャブ山地の農民は保守的なハナフィー派のムスリムで、カラテギンとクリャブの違いは、程度の差であろう。タジク内戦が宗教戦争でないことは、クリャブでは、民主・イスラーム同盟に対して、イマームが民衆を扇動していたことで明らかであろう。現在のタジキスタンは、ゴルノ＝バダフシャン自治共和国を別にするとソグド（旧レニナバド）州、ハトロン州、ドシャンベおよび直轄地（旧カラテギン州）の 3 部分からなり、それぞれが人口 2 百万人程で鼎立している。伝統的に北の住民（ギサル山地およびトルケスタン山地より北の平原と山麓）と 19 世紀にはブハラ・ハンに臣従するベグの領地であった主として山村の住民からなる南の住民は、共通の民族的文化を持っていなかった。山地の農民は北部のタジク人をトルコ人やモンゴル人と混血した種族、或はウズベク化した人々と考え、自分達を純粋なタジク人であるとみなしていた。一方北の住民は南の住民を半ば野蛮な未発展な人々と考えた。さらに南タジク人にはいくつかの地域的名称を冠した中区分クリャブ人、ギサル人、カラテギン人、ダルヴァ

ズ人などの集団が存在する。これは単に出身地に基づく郷党意識ではなく、同名の州がある場合にもその州の住民を意味するのではなく、共通の祖先を持ち各地に移住した人々の全体が地名を用いて表現されている。また、部族や氏族のような組織とも異なっているが、其々が地域的下位区分を持ち、クリャブ人には、エフスチ（Ekhsuchi）、サルハディ（Sarkhadi）、カラテギン人にはギャルム Garm,ハイト Khajt などの下位区分が見られる。ギサル人にはヴァルゾブ Varzob、ロミト Romit,カラタグ Karatag が含まれる(Rasy I narody,Chbyr',L.A. O strukture tadzhikskogoetnoooca,2001）。これは現在の方言や習俗の分布とは重ならない。ソヴィエト・タジキスタンの政治はこれら地域的要素の組み合わせとバランスからなっていた。

オリモヴァ Olimova,Saodat は、内戦期の地域対抗に関して、「あらゆるエリート集団が権力闘争に加わった。タジキスタンでは彼らは異なった地域的集団を代表していた。地方のエリートは国家構造を組み立てるのに失敗して、分裂したままであった。これが、ソヴィエト権力が打倒されて国有財産が分割され、地方エリートは地方では強力な政党を樹立し、強力な反政府運動が権力や金力に飢えたエリートによって推進された理由である。イスラーム再生党はカラテギンの公認イスラーム僧侶、商業、行政エリートによって利用された（*Central Asia and the Caucasus*,2001,1,p.114）」と評価している。

このようにタジク内戦がイスラーム勢力と反イスラーム勢力の戦いであるとはいえない。しかし、イスラーム再生党は世俗政党としてイスラーム的価値観を追及し、反再生党のあるいはカラテギン以外のイスラーム教指導者は、政治と宗教を区分するソ連時代の考え方に馴染んでおり、カラテギン人の山地農民は、近代法を全く排斥はしないとしても社会的規則の中心にシャリーアを置こうとし、またクリャブの人々も信仰において自分達の伝統的指導者に従い、ソグドの人々もイスラームの実践を通過儀礼や個人的救済の面に限ろうとしていたと判断することはできよう。

再生党の指導者ヌーリーは2002年に、イスラーム解放党について2名のジャーナリストのインタヴューに答えて、中央アジアではタジキスタン以外では政治的イスラームの声が封じられていることについて、「我々は一部のムスリムを代表するだけである。どうして彼らが自由に意見を言えないのであろうか。彼らもまた同じ市民であり同じ権利を持っている。彼らからこの国の政治的生活に加わる権利を奪うのは非民主的である（Eurasianet.org/departments/qanda/articles/wav/021301.shtml）」。タジキスタン・イスラーム再生党は、政治的に極めて洗練された現実的な路線をとっているとすることができよう。

4. ウズベキスタンにおけるイスラーム運動

1）ウズベキスタンにおけるイスラーム政党の誕生

1994年には、中央アジア全域で7,800のモスク（金曜モスク、および祈祷所）が機能していたが、内半数がウズベキスタンに存在していた。1989年から1991年までに政府は、かつてソ連時代に没収した宗教施設を信者に返還した（Haghayegi,96）。独立後の数年間で380のマドラセが開設されバラク・ハン、ミールアラブの学生数も3倍になった。1991年には、タシケントにククレダシ Kukredash マドラッセが開設され、旧ソ連において最も権威の高いアル=ビールーニー高等学院も学生数が2倍（Haghayeghi,96-7）になった。

ウズベキスタン将来の出発となる社会運動は、1988年10月28日ウズベキスタン民主党設立（Alamz Estekov）に始まった。同党は不道徳を諫め、コーランの民主的原則を広めることを方針とした。同党は、1989年2月一連のデモを組織して、中央アジア・ムスリム宗務局議長ムフティー、ババハノフ Shamsddin Babakhanov の飲酒、姦淫、宗教的素養の欠如等を批判し、その地位から追放した。シャムスッディン・ババハノフは、1982年10月父ズィアッディンを継いでムフティーとなったが、1981年3月対外友好協会の幹部となり、以後一貫してソ連の対外政策の一端を担っていた。1985年には人民代議員にも選出された（Benningsen,A.etal.*Soviet Startegy and Islam* ,p.60）。党員数はこの年（1989年）2,500人に達したが、地方都市アンディジャン、ブハラ、サマルカンド出身者が多かった。設立大会でもベールの着用、シャリーアの適用を主張した。また別の指導者ダードハン・ハサンは、イラン型のイスラーム国家を賞賛し、全ムスリムの統合、若い世代に対するイスラーム教育、選挙によって地域の役職を確保することを展望したが、暴力によるイスラーム政府樹立は望まなかった。

しかし、1999年にウズベキスタン共産党第一書記であったイスラーム・カリモフ Islam Karimov は、世俗的民主主義であれ、イスラーム主義であれ自分の前に立ち上がるものに容赦ない鉄槌を加えた。先ず、自分自身がイスラーム的価値を標榜して、反対党の政策を取りいれた。1992年の大統領選挙では野党候補者ムハンメド・サレフ Muhammed Saleh を不正選挙で一蹴した。次に1992年3月にイスラーム再生党とフェルガナ州ナマンガンで活動していたアドラト Adorat,Adarat（公正）党を非合法化し、指導者を投獄した。野党ビルリク Birlik

の指導者アブドゥルラヒム・プラトフ Abdurrahim Pulatov にテロルを加え亡命を余儀なくさせた。ムハンメド・サレハもまた亡命した。また、1992 年 12 月に発布した憲法では、「民族主義や宗教的原理」に基づく政党の活動を禁止し（宮田律『中央アジア資源戦略』時事通信社、1999 年 95-100 頁）、あらゆる段階のイスラーム反対政党の動きを封じ、イスラームを純然たる信仰のレベルに閉じこめた。

また、ムフティー・ババハノフの後任で、同じく人民代議員に就任したタシュケントのアル・ブハーリー高等神学校の校長であったムハンマド・サーディク・ムハンマド・ユースフ Mukhammad Sodyk Mukhammad Jusuf に政治的発言が多いことを知ると、彼を解任、ムフタルハン・アブドゥラエフを後任に選んだ。アブドゥラエフは政治に無関心であるが、スーフィズムに対しては、批判的見解を有していた。また依然として勢力を擁するババハノフをエジプト大使に任命した。

2）ウズベキスタン・イスラーム運動

ウズベキスタンでは、民主主義政党かイスラーム政党かを問わず、カリモフ政権に反対する組織は一掃された。ウズベキスタン・イスラーム運動、イスラーム・解放党はそのような政治的風土から誕生した。ウズベキスタン・イスラーム運動は、フェルガナにおけるアドラット運動が、タジキスタン内戦の中で、軍事組織に転換したものであった。この組織はカリモフ政権を打倒するために 1998 年の創立以降（1996 年、1999 年とする文献もあり）、タジキスタンのカラテギン渓谷を経由してウズベキスタン、キルギスタン南部とアフガニスタンを移動し、現地官憲と衝突し、1999 年には、日本人技術者誘拐事件を起した。

2000 年には「ウズベキスタン・イスラーム運動は、アフガニスタンにも今日どの国にもない預言者の制度から直接出る純粋なシャリーア法に基づいたイスラーム宗教制度を作るためにジハードを宣言した」。

フェルガナには既に 19 世紀に原理主義が持ち込まれていたが、1980 年代にはアンディジャンに Muhammad Haji Hindustani、彼の弟子 Abdulwali Qari、マルギランの Rahmatollah が、教育や布教にあたった。1991 年 12 月 8-9 日、ワッハーブ主義者は、ウズベキスタン・イスラーム再生党、タイバ（タウバ Towba）、アドラトのメンバーと共にナマンガンでデモをおこない、共産党ビルを占拠した。直ちに 24 歳のタヒル・ユルダシェフやワッハーブ派地下モスクのイマームらは自治政府を宣言し、政府にイスラームを国教とする憲法を要求、シャリーアの実施を要求した。折から大統領選挙カリモフのナマンガン訪問と公認僧侶の大統領支持に対抗して、1992 年 1、2 月 5 万人規模の支持者動員を行なった。カリモフは指導者 71 人を逮捕したが、アドラトはイスラーム・ラシカリ Islam Lashkari と協力して、政府が完全に権威を回復する同年春までに一種の神制政治を実行した。彼らは腕に緑の腕章をつけて町の中心を監視した。娼婦や泥棒を捕まえた時は罰として後向きにロバに乗せて市中を引き回し、広場の柱に縛りつけた。通りすがりの人々は彼らに唾を吐いた（Haghaeyeghi、93-94）。また犯罪者はモスクに引き立てられ杖で打たれた Igor Rotar,*Keston News Service*,18 December 2001［keston.org/011218Central%Asia.htm］。

ジュマ・ナマンガニ Juma Namangani（Jumbai Hojjayev）は 1969 年生まれ、ソ連軍兵士としてアフガン戦争に従軍。除隊後、タイバ Taiba,Toiba（悔み）運動を起こし、イスラームを学んだが、タジキスタン再生党のムハンマド・シャリフ・ヌーリーに助けられて、アフガニスタンに送られ、ジャマーアテ・イスラーミーのキャンプで軍事訓練を受けた。さらにパキスタン、サウジアラビアで訓練を続けた。1993 年にはタジキスタン野党連合に加わって、パキスタンとサウジアラビアに供給された資金で軍事基地を運営した。1996 年に再びサウジアラビアで宗教教育を受けた。1999 年 8 月 800 人の部下を率いて南キルギスタンに入り、バトケン Batken 山地の集落を占拠して根拠地を築きウズベキスタン領を攻撃した。2000 年の夏にはタシケントから近いウズベキスタン領に進んだ。ウズベク政府の強い要求でタジク政府はカラテギン渓谷タジカバドの基地をアフガニスタンに移動させた（12 月には、タジキスタンのタヴィルダラ Taverdara に 200-300 人の熟練兵士を移動させている）。さらにこの組織は 2001 年 6 月「トルキスタン・イスラーム党」と組織を改変し（成立の年次については別の説明もある）、中央アジア諸国と中国シンジャンン・ウイグル自治区にイスラーム国家を樹立することを目指した。根拠地はアフガニスタン北部アザリシャリフの南デヘダディ DeheDadi である。党首はナマンガニ、副党首はタヒル・ユルダシェフで、当時彼らは約 3000 人の兵士を擁して、北部同盟と戦っていた。2000 年アメリカ政府は、運動がオサーマ・ビンラーディンと関係があることを指摘、キルギスタンに国境警備のための装備も含まれる 3 百万ドルの装備訓練一括援助を行なった。2001 年 6 月にはキルギスタンのテレビ回線をジャックしてキルギスタンとウズベキスタンに宣伝放送を流した。ナマンガニはオサーマ・ビンラーディンの代理を務めることもあったが、同年アメリカ軍との戦闘で、あるいは爆撃によって死亡したといわれている。

タヒル・ユルダシェフ Tohir（Taher）Yuldashev は、1999 年 2 月のタシュケント爆弾事件後の、5 月ターリバンの許可を得て、アフガニスタンに基地を設置した。2000 年 11 月には、ナマンガニ共々欠席裁判で死刑の判

決を受けた。2001 年にはトルキスタン・イスラーム党の副党首に就任、現在はイランあるいはアフガニスタンに潜伏中であると言われる。Uzbekexile forms Political Party,Institute-for-Afghan-studies.org/dev_xyz/new/2001_05_21_dawn_uzbek_exile.. ; Mann,Poonam、Islamic Movement of Uzbekistan:Will it Strike Back?Abstract,idsa-india.org/an-apr8.htm ; Poph,Rafael,La histroia de Namangani,*La Vanguardia*,1 de noviembre ; lainsignia.org・2001/noviembre/int_024.htm ; Makarenko,Tamara. The Changing Dynamics of Central Asian Terrorism, *Jane's Intelligence Review*, February, 2002 (Cornellcaspian.com/briefs/020201_CA_Terrorism.htlm);fsumonitor.com/stories/121701Uzbeki.shtml

3) 残存勢力の活動

今年（2003 年）4 月、ウズベキスタン当局者は、アフガニスタンを逃れタジキスタンの山地に潜伏していると思われる同党残党がフェルガナ地方で根拠地を作ろうとしていると発表（Rantburg,4/27/02）。また、キルギスタン政府当局者 5 月 24 日の記者会見で、5 月 8 日オシの両替所が爆破され、7 人の容疑者を拘束し爆発物、過激派の文書を押収したこと、ジャララバド州で覆面をした 8 人の集団が警察署を襲い多数の武器を奪って逃走したことを発表（ibid.5/24/03）した。また、7 月キルギスタン政府要人マムィトフ Tokon Mamytov（国家安全局議長）は、ビシュケクとオシュの爆弾事件を彼らの仕業であると断言した（ibid.7/2/03）」。アメリカ政府は、ウズベキスタン・イスラーム運動の残党が、国際テロリスト基金から 40 万ドル（34 万 6 千ユーロ）を供給され、彼らが中央アジアに浸透を試みていると発表した。しかしこれまでのところ、それ以上の活動は報道されていない。米ロ中および中央アジア諸国の連携のもとで、武力グループの活動は押さえられていると判断してよいであろう。

5. イスラーム解放党（Hizb Tahrir al-Islam）

1) ウズベキスタンにおけるイスラーム解放党

追放されたイスラーム民主党に代わってウズベキスタンで広く支持をうけるのが、イスラーム解放党である。この政党は 1953 年にヨルダン人タキウッディン・アン・ナブハニーTaqi al-Din an-Nabhani によって、イェレサレムにおいて設立された。最初はムスリム同胞団のパレスティナ支部であったが後に独立したものである。1979 年にタキウッディンが死亡すると、アミール Amir（党首）の地位はヨルダンに住むパレスティナ人アブドゥル・カリム・ザルムに引き継がれた。本部（アミラ Amira）はドイツ、イギリス（ロンドン）に置かれている（NG,2003,6,11）。「その目的はイスラーム的生活を再開し、世界にイスラームの呼びかけをもたらすことである。この目的の意味することは、ムスリムの社会生活をシャリーアの規則とイスラーム世界とイスラーム社会をイスラーム的生活に戻すことであり、その観点は、イスラーム国家つまりカリフ国の影の中でのハラール（適法）とハラム（非適法）である（Hizb ut-Tahrir,Media Information Pack,www.1924.Org）。同党の特徴は「預言者ムハンマドはイスラーム国家を作るための闘争を知的かつ政治的分野に限った。それゆえ党は体制に対する暴力や武力闘争は、イスラームのシャリーアからの逸脱である」。「イラク、シリア、リビア、ウズベキスタンやその他の圧政者は、数十人の党員を殺した。ヨルダン、シリア、イラク、トルコ、エジプト、リビア、チュニジアの投獄は党員で溢れている。しかし、イスラーム解放党は呼びかけにおいて公開、透明、挑戦的である。政治的行動だけを用い、呼びかけを押さえつける支配者や弾圧者に対して物理的手段に訴えて、それを超えることはない。メッカにおいては、呼びかけるだけに自制して、メディナに移住するまで物理的行動を起こすことがなかった神の使者の例に倣って」。かくして、イスラーム解放党は政治的手段のみによって、イスラーム世界にカリフ制を樹立しようとする。アタチュルクによるカリフ制の廃止（1923）やカリフ制を復活しようとする試みがなされてから、それ自体は特異な主張ではない。しかし、カリフ就任の適任者は、これまでどのようなイスラーム政治学者も主張しなかった「誰がカリフ国で統治者になるのか、彼は国民に対して責任があるのか。カリフはコーランに下された神の命令のままに国家を統治する。人々はカリフを選び、指名する。イスラーム国家の市民として、男であれ女であれ、ムスリムであれ非ムスリムであれ、あなた方はカリフに近づけます。これはいかなる場合でも実行されます。彼が神を畏れるか、またはあなたの権利を求めるように励まされますよう。人々はもしカリフがイスラーム以外のことに従事したら解任しなければならない」。ここで明確に示されていることは、非ムスリムが、イスラーム国家の市民であることである。しかし、通常のイスラーム法では、非イスラーム教徒は、近代的意味の市民ではありえない。イスラーム解放党はイスラームとしては、非常に斬新な政治思想を持っていると考えられる。

ヒューマンライツ・ウォッチ HRW の活動家であるアケイスィア・シールズ Acacia Shields は、ウズベキスタンの「解放党は非暴力を表明して、国内メンバーでやっているグループです。彼らはこれまで何か特定の暴力を起こしたと非難されたことはありません。また、ウズベキスタン・イスラーム運動と関連が疑われるような声明を出したこともありません（Bruce Pannier, Central Asia; Governments React to Uncertain Threat form Hizb ut-Tahrir,part.2.*RFE/RL*,30 May,2002;religio.com/articles/2002/002_hizb_b.htm）」。

同党の活動がウズベキスタンで活発化したのは 90 年代末と考えられるが、実際の活動は、「ユダヤ人異教徒イスラーム・カリモフと彼の組織の凶暴な攻撃は、解放党のイスラームを弱めない。イスラーム教徒よ、気を落とさないように。（Rotal',op.cit.77）」などと書いたビラを配布する程度である。同党の近い将来にはかなえられそうもない目標はカリモフ政権には重大な脅威と映った。「イスラーム解放党の目標は、根源的で極端である。我々は法に従ってこの組織をウズベキスタンの領土から、追放する」（Antine Blua,Uzbekistan: Karimov ExtendsWar On Extremism To Women,*Radio FreeEurope/Radio Liberty*,2002,5,6）。かくして、ウズベキスタンでは 5,000 人から 7,000 人の解放党員容疑者が投獄されているという、一方、5 人からなる細胞組織に編成されている党は、中央アジア全体に数千人から 10 万人に上る党員を抱えるとも言われる。2002 年に逮捕されたアブドゥルハリルの場合は、2003 年に「体制変革を試みた」罪で、禁固 16 年を言い渡されたが、タフリール党のパンフレットの保持は勿論、非公認モスクでの礼拝、アラブ式ヒジャブの着用、老人以外の頬髭などが、逮捕の理由になっており、自白させるためには種々の拷問が実施され、そのため獄死するもの多数を出している。またウズベキスタンでは解放党に留まらず、反政府活動家全般に対して、逮捕が活発に行われている。7 月 25 日には、Harakat のメンバー、ハムルエフ Bakhrom Khamroyev が逮捕された、彼はビルリク（リーダーAbdurahim Polat）の活動家であった（Muslimuzbekistan.com,Julay23,2003 < CAHRIN,07/23/2003;Sergei Pyatakov,newscentralasia.com）。中央アジア特にウズベキスタンにおける、あるいはフェルガナ盆地と周辺におけるイスラーム解放党勢力拡大の理由は、ウズベキスタンでは、政治的目標を提示する他の手段が欠如していることであろう。この地域では民主的方法によって政治的目標を提示、あるいはそれを支持する手段は限られている。特にイスラーム的政治社会的理想を持つ人々にとってはそうであるが、タジキスタンにおけるイスラーム解放党の活動は反イスラーム的風潮が強くタジキスタン・イスラーム再生党の活動は勿論、イスラーム信仰においても制限があるレニナバド州（現ソグド州）において活発であることからも推測される。カリモフ大統領が解放党の摘発に執着する理由は、International Crisis Group（ICG）のガズィエフ Azizulla Gaziyev は、ケストン・ニュース社のイゴル・ロタル記者に「多くの注釈者はウズベキスタン大統領に対する主要な反対派は、国際的組織解放党のウズベキスタン支部にしろ、ウズベキスタン・イスラーム運動の武装グループにしろ、イスラームに関係ある反対派であると予想しています」と述べるが、ロタル記者も同感であった（fsumonitor.com/stories/121701Uzbeki.shtml）。

2) タジキスタンとロシアのイスラーム解放党

一方タジキスタン政府も解放党に対して弾圧を加えている。2003 年 5 月、ソグド地区で 6 人の活動家が逮捕され、パンフレットや書籍を押収した。今年になってからその時までに 20 人以上（Pravda,2003,5,30）逮捕されている。ウズベキスタンと違って、彼らには競争相手が存在する点が異なる。イスラーム再生党のサイド・アフマド・ヌーリーは、彼らが極端であるので再生党は、彼らの影響力を削ぐために全力を尽くすと述べる（RFE/RL,30 May,2002）。逆に、解放党の幹部自体が再生党を次のように批判している。「我々はイスラーム再生党の方法を取る人々には同意しない。我々はイスラーム・カリフ国を作るまで平和な方法で進む。それゆえ彼らとは歩を共にしない。しかし、我々は兄弟である。彼らは物事を別様に考え、自分達が正しいと思っている（Ibid）」（International Crisis Group 略称 ICG）。2000 年にアメリカ政府は、ウズベキスタン・イスラーム運動をビン・ラーディンと拘わりありとし、テロ組織に指定したが、タフリール党は指定しなかった（Institute-for-Afghan-studies.org/dev_xyz/new/2001_05_21_dawn_uzbek_exile）。

2003 年 2 月 14 日ロシア最高裁判所は、解放党をロシアで活動する 15 のテロリスト団体のリストの中に入れた。この中にはチェチェン系 2 団体、トルキスタン・イスラーム党、ムスリム同胞団などが含まれている（Izvestija.ru/politic/14-02-03/article30078）。続いて、6 月 6-7 日には、モスクワでイスラーム過激派に対する一斉取り締まりが行われた。6 月 9 日には連邦保安局は 121 名を拘束した旨を公表した。この内 55 名がイスラーム解放党関係者であった。当局の発表では、彼らの内 2 名 Musayev と Jalolov は火薬（100 グラムおよび 400 グラム）、手榴弾、ビラ、起爆装置を所持していた。ウラディミール・チュマク Vladimir Chumak 弁護士は、2 名の逮捕者は容疑も党との関わりも否定しているという。またこの HP には解放党のコミュニケが付されており、解放党がテロを行うことは有り得ず、証拠品はウズベキスタンでよく行われる当局によるでっち上げであると

主張している。Sergei Blagov, Hizb ut-Tahrir:la Russe determinee a contenir l'islame radical,*Religio Scope*,29 Jun 2003＜religioscpoe.info/article_179.shtm＞。セルゲイ・ブラゴフは、イスラーム国家を支配する異教徒植民地主義者に対する抵抗を承認する文章があるとして、チェチェン問題を抱えるロシア治安当局には看過できないと断言する。ブラゴフによると今年2月のテロリスト団体指定にいたるまで、当局は数度にわたって解放党を非難している。2 年前にイヴァノフ外相は「外国の本部から資金を供給され、ロシアと近隣諸国をイスラーム化しようとしている非常にラディカルな極端な秘密組織」、CIS 反テロリズム・センターの責任者ボリス・ムイルニコフ Boris Mylnikov は、国際テロリスト組織であり、ロシアと CIS にとって潜在的脅威である」。2002 年 12 月 16 日には、連邦保安局のニコライ・パトルシェフ Nikolay Patrushev「軍隊を組織していて、そのような組織に参加している（ibid.）」と述べる。しかし、ブラゴフ自身は、北コーカサスのワッハーブ派と解放党との関係は証明されていないとする 。

3）平和路線の維持か路線変更か

確かにアフガン人を救援に行こうというパンフレットがタジキスタンやキルギスタンで配布されたが、（fsumonitor.com/stories/121701Uzbeki.shtml）そもそもタフリール党に限らず、外国からの侵入にも戦わないという綱領はありえない。解放党の思想が、絶対平和主義であることを期待する必要はない。しかし、同党の HP では次のように述べられている。

「政治的闘争は、次に代表されている。イスラーム諸国を支配し、影響を与える異教徒の植民地国家に対する闘争。知的、政治的、経済的、および軍事的形態での植民地主義に対する挑戦は、その計画を明らかにし、陰謀を暴くことによって、ウンマをその支配から放し、どのような影響からも解放するために（Hizb ut-Tahri HP,hizb-ut-tahrir.org/english/definition/messages.htm）」。「その計画を明らかにし、陰謀を暴くことによって」戦うことが主張されているのである。

一方、キルギスタンの情報関係高官ポルエトコフ Boris Poluetkov は、トルキスタン・イスラーム党は、中国西部のイスラーム分離主義やヨーロッパのオブザーバーによって、中央アジアにイスラーム国家を建設しようとする野望にも拘わらず非暴力組織であると認められている解放党組織と密接な関係を組んだと述べ、「私はヨーロッパ人だ。私はオブザーバーだ。私は彼らが非暴力的だとは思わない（Central Asia: Islamic radical regrouping, *Rantburg*, 7/2/30, <rantburg.com/default.asp?D= 7/2/03&C= CentralAsia>」。残念ながら筆者はキルギスタンの治安関係オブザーバーでも、西欧人でもないのでこの高官の述べるところは理解できない。

タフリール党は信仰団体ではなく、政党であるから政策の転換や、分党や解散、いずれにしろ脱落者をみることは可能性がある。しかし、現時点で武力闘争主義への転換はあるのであろうか。『ユーラシア・ネット』に引用された、International Crisis Group（略称 ICG）は、同党を「思想と宣伝の範囲で、活動している基本的に平和なグループ」であると見ている。解放党は、無辜の傍観者を殺すことは、イスラーム法違反であると考え、ことさらにテロリズムを批判している。しかし、このレポートは「解放党が本来的に暴力に反対しているという考えは誤りである」と注意をうながしている。解放党のイデオロギー的基礎は、中央アジアの既成政府を放逐し、イスラーム・カリフ国を樹立するというものであるが、暴力を用いる可能性を残している。ICG のレポートは次のように示している。『明らかに防御的ジハードが、非常に広い形態に解釈される可能性はある』。レポートは述べている。キルギスタンの当局者はイスラーム解放党やウイグル人分離主義者、ウズベキスタン・イスラーム運動を含む中央アジアのラディカル・グループを統合しようとする何らかの動きが進行中であるとする。ICG レポートは諸グループの中の戦術的、戦略的総意が大きいのでそのような合同には疑惑的である。『戦術上の違いは、国際的指導部の側のイデオロギー上の重要な策略なしには克服するにはあまりにも大きい。』ICG レポートは述べる。『ウズベキスタン・イスラーム運動との有機的な、また組織的連携の証拠はない』。『イスラーム解放党の一部、特にウズベキスタンにおいては、今よりもラディカルな手段をとる呼びかけに反応するかもしれない。しかし、今のところ恐らく得るものよりは、失うところが多い』。レポートは続ける。解放党は中央アジア、特にウズベキスタンに2万人に及ぶアクティブなメンバーを持っている」。

重要であるのは昨年であるが、タマラ・マラシェンコが「イスラーム解放党が目標の平和的達成に背を向けることは有りそうもない。しかし、挫折、失望、西欧がこの地域に大きな関心を寄せているのに中央アジアはほとんど変わらないだろうということから、細胞はやがて脱落し、暴力行為にでるかもしれない証拠は増えている。事実、イスラーム解放党は、自分の国をアメリカの植民地にした地域の指導者に対する失望を表している（Changing Dynamics of Central Asian Terrorism, *Jane's Intelligence Riview*,February,2002 ＜ cornellcaspian.com/briefs/020201_CA_Terrorism.html）」と述べる点である。しかし、党の綱領自体に暴力の余地を残しているというのと、平和路線からの脱落者がでるのはまったく別の事項であろう。綱領においては「メッ

カにおいては、呼びかけるだけに自制して、メディナに移住するまで物理的行動を起こすことがなかった神の使者の例に倣って」とある文章が、いつかメディナにおける預言者の例に倣うことが含意されているかは、気になることではあるが、宣伝文書の文言の分析をし、全党レベルでの綱領の変更や読み替えがあるかどうかの調査が必要であろう。

ジャーナリズムの中には、タフリール党の平和的方針は、アメリカの「テロリズムに対する戦い」以後変化を見せているとするものがあることは、上に述べたとおりであるが、ウズベキスタン科学アカデミーのイスラーム専門家ボボジャノフ Bakhtiyar Bobojanov は、タフリール党は「テロリズムに対する作戦」以後、思想的変化があったとし、「アフガニスタンで始まったテロリズムに対する作戦の後、ヒズブウッタフリールのポジションは変化し、彼らはもっとラディカルになった。彼らはイスラームのための戦争で戦い、殉教者となることを呼びかけるビラを配っている（Central Asia; Governments React to Uncertain Threat form Hizb ut-Tahrir,part.2.*RFE/Rl*-30 May,2002; religio.com/articles/2002/002_hizb_b.htm）」。これは事実の説明であるとするよりは、単にウズベキスタン政府に近い見解としておいてよいであろう。

しかし、政府側のいかなる言説にも拘わらず、イスラーム解放党が組織として、積極的にテロリズムや破壊活動を行なったという証拠はない。ウズベキスタンにおいては刑法上重要なことは、彼らの手段が平和的であれ暴力的であれ体制の変革を目標としていることである。ロシアにおいてはこのような理由では、彼らを取りしまることができない。中央アジアにおける政情の安定はロシアにとって重要な政策目標であるが、ウズベキスタンとは異なり、ロシアにおいては、爆発物所持や麻薬取引の所持といった捜査上の具体的要件が必要である。逆説的に言えば、捜査現場の考え方では、テロリスト団体へ指定された以上、必ずテロリズム計画実施の物質的証拠があるはずなのではないか。ロシア政府はより具体的な証拠を示す義務があろう。

6. 過激イスラーム主義拡大の背景

1) イデオロギーの空白

「タタールスタンではソ連崩壊後にイヴァン雷帝によるカザン汗国征服にはじまるタタール人の歴史的怒りを実現させ、それをロシア帝国に向けようとする多くの組織が誕生した。しかしこれらの組織は成功しなかった。少なくとも、チェチェンやダゲスタンのようにタタールスタンでは分離主義的か、イスラームのラディカルなセクトは作られなかった。このような問題はロシア共和国のイスラーム組織のリーダー達が外国のスポンサーとの関係に関して、現在関心が高まっていることである。例えば国際イスラーム団体はチェチェンに劣らぬ関心をタタールスタンに示しているが、しかしヴォルガ沿岸の共和国の政治的安定を覆すには至っていない（Emil Pain, Sotsial'naja proroda ekstremizm I terrorozm, RMM, 2002, no.11, p.116）。

2) 社会的混乱

イギリス『ガーディアン』誌は、駐タシケント・イギリス大使の Craig Murry は「ここでは厳しい迫害が富の偏在と改革の不事項とあいまって、体制が消滅させようとしている原理主義を作っている（Gurrdian.co.uk/international/sotry/0,3604,963497,00/html）」というコメントを伝えている。また、『旧ソ連ユダヤ人協議会連合』（Dec.17.2001）は、現代イスラーム研究者であるイゴル・ロタル Igor Rotar『ケストンニューサービス』（12 Dec.,2001）を引き「ウズベキスタンの宗教関連当局者の言によるとイスラーム原理主義の主要な社会的背景は国民の中で最も貧しい人々である。また、他の者も貧困は世俗権力による宗教生活の厳しいコントロールに拘わらず、ウズベキスタンの不安定の要因となっている」。「両組織のメンバーは 25 歳から 30 歳までの若い人々である。ケストン社に語った人物は、たった 5 年前に彼らは本当のムスリムではなかった。断食を守らず、酒さえ飲んだ。しかし、この 10 年の中央アジア社会の急速な貧困化とそれまで知られていなかった売春と麻薬使用は彼らを『イスラーム国家だけが人々に威信ある生活を与えることができる』と確信した（fsumonitor.com/stories/121701Uzbeki.shtml）」。

分析家は中央アジア特にウズベキスタン、タジキスタン、キルギスタンにおけるラディカルなイスラーム運動は、慢性的貧困と地域を病ませ続けている基本的自由の欠如であろう（Bruce Pannier, Central Asia; Governments React to Uncertain Threat form Hizb ut-Tahrir,part.2.*RFE/RL*,30 May,2002;religio.com/articles/2002/002_hizb_b.htm）。

タフリール党のキルギスタンの活動家は自分の仕事の展望について次のように述べる。「人々は民主主義にウンザリしている。周りは失業と不道徳だ。我々の人々はムスリムで、彼らは神を求めており、神の法によって生活したがっている（Bruce Pannier, Central Asia; Governments React to Uncertain Threat form Hizb ut-Tahrir,part.2.*RFE/RL*,30 May,2002;religio.com/articles/2002/002_hizb_b.htm）。ウズベキスタンにおいてもキルギ

スタンにおいても、人々に民主主義を宣伝しているのは、民主主義とは全く無縁な権威主義政権である。民主主義のために残された時間がまだ沢山残っているとは言えないのではないか。無論解放党は、民主主義を主張しない。ある南キルギスタンの党員は、「キルギスタンの政府は、ウズベキスタンに比べると寛容である。彼や彼のグループは政府を転覆させ、国の大統領アスカル・アカエフに何の悪い意図も持たないと述べた。「我々は民主主義制度に対する反対者だ。我々は個人がイスラームに帰依させ、アッラーのもとに帰るのに反対ではない。もし誰かがシャリーアに従って生きたいと望めば、彼は我々の兄弟である。もし彼が民主主義を望み、異教徒の法によって生活したいと望めば、その時、彼は我々の敵である。異教徒は我々の敵である。もし、アカエフが望んでイスラームを受け入れ、もしシャリーア法を敷けば、彼は自分の王座に座ることができる」。

3) 信仰上の理由

ウズベキスタン・イスラーム運動メンバーの組織加入の動機について、「私は1973年に南キルギスタンの村に生まれました。私の民族はウズベクです。1997年、私は敬謙な信者で、あるムッラーのもとに定期的に通ってイスラームの勉強をしていました。しかし両親は私を理解せず、私の信心を笑いました。さて先生は私にウズベキスタンに行って、そこの地下メドレセでイスラームを学ぶように進めました。それで私はマルギランに行きました（ウズベク領フェルガナで、フェルガナの中心都市から10キロメートル）。私はしばらくその地域の地下メドレセで学びました。次に私の新しい先生は私と他の6人の学生をタシュケントへ送るつもりだといいました。先生は節約のために、山越えで歩いて行くと言いました。私達は案内をつけられて、出発しました。3日目に私達の道案内は、実は我々はイスラームのために戦うためにタジキスタンに行くのだと言われました。彼は我々には新しい名前が与えられるので、古いほうは忘れるように言いました。我々は驚きました、しかし口答えしませんでした。イスラームでは自分の先生に口答えするのは罪だからです。タジキスタンでタジカバド（タジキスタンのカラテギン渓谷地区の中心）の町から数キロメートルのところにある使われなくなった地震観測所に落ち着きました。地震観測所はよく手入れされた基地になっていました。ジュマ・ナマンガニは私たちに会い、私たちがイスラームの兵士になったことを祝福しました。

キャンプでの日課は次のとおりです。朝は、教練で、次にさまざまな種類の武器の使用法が続きます。夕方にはイスラームに関するビデオをみました。本は宗教に関するものだけを読ませられました。音楽は聞かせてもらえませんでした、イスラームでは罪だからです。ウズベク語のラジオ・リバティーだけを聞かせられ、他のラジオは聞かせてもらえませんでした。我々は良く扱われました。指導者と前線の兵士は強大であり、異教徒の支配からウズベキスタンのムスリムを解放する大きな名誉を与えられたのだと言われました。2ヶ月後若い戦士コースを終了し、別のキャンプに移されると言われました。タヴィルダラ Tavildoro（カラテギン渓谷の地区の中心で、パミールから数10キロ）へやられました。このキャンプで2人の外国人インドから来たアビルババAbirbaba先生とパキスタンから来たシェイフ・アッバースSheikh Abas先生でサボタージュ戦術を習いました。彼らはとても経験のあるムジャハッディンでした。アビルババはカシミールで戦い、シェイフ・アッバースはアフガニスタンでソ連軍と戦いました。夕方我々はムスリムが不信心者と戦っている世界各地の映画をみました。不信心者の支配から世界中のムスリムを解放するまで戦うのはムスリムの義務であると言われました。しかし、私は軍隊のキャンプで暮らすのはうんざりでした。食事は日に日に悪くなるし、毎日退屈でした。私は2週間の帰省休暇を申請することにしました。ついに（1998年）5月にキャンプを離れることを許されました。まだ帰っていません。Igor Rotar, *Keston News Service*,18 December 2001,keston.org/011218Central%Asia.htm）」。過日、同運動に参加して、キルギスタンで逮捕され、終身刑を宣告されたたロシア・タタール人青年のドキュメントがNHK特集で報道されたが、そのタタール人青年もイスラームを勉強したいという単純な好奇心からナマンガンのグループに近づいたのであった。シャミエフタタールスタン大統領は、国内に適切なメドレッセがないため、イスラームに対する興味を抱いた青年が、奨学金や留学に引かれて、外国のイスラーム団体に近づき、テロリストに仕立て上げられると述べた状況がここにも認められる。従ってこれは単純な社会的怒りではない、思想と信条、言論と出版の自由が保証される社会においてのみ、イスラーム過激派の活動は制限されるであろうが、それはイスラーム政党の存在が禁止されていないタジキスタンにおいては部分的に存在するとしても、公認イスラーム以外の信仰は事実上禁止され、政治的反対派が迫害されているウズベキスタンには全く欠けるのである。

4) ロードマップ

Asal Abbasova(International Imam al-Bukhari Foundaition)は、「ソ連のイデオロギーのために中央アジアのムスリムが被った神学上の空白と宗教組織が存在しなかったことは、あらゆるラディカルなイスラームが中央アジ

アの人々に無縁な宗教的文化的伝統の花を咲かせる豊かな土壌になった。一部の外国勢力は目的を達するために宗教と文化の平和的共存に反対する使い方をしている。ラディカルなイスラームの危険性は民主主義を発展させ、緊急な社会、経済、生態、人口、およびその他の問題を解決することで取り除くことができる。ウズベキスタン共和国では、協調的材料と精神的生活に導く社会的、政治的経済的条件が必要である(2001,No.1,125)」。まさに帝国の側もまたテロリストの側も共にウズベキスタンの民主化を阻止している。アメリカ政府主導の民主化プログラムはせめてタジキスタンと同じ程度の政党活動の自由を保証するためのロードマップを提供するべきであろう。特筆すべきは、カリモフ政権に対する米国の関与である。「テロリズムに対する作戦」以降アメリカは、ウズベキスタンの治安関係経費を援助し、カリモフ政権の人権蹂躙を助けていると言われる。一方では民主主義を援助(2002年に26百万ドル)する実施もされているが、ヒューマンライツ・ウォッチ関係者の言では何の変化も見られない(*The Guarrdian*,Gurrdian.co.uk/international/sotry/0,3604,963497,00/html)。

7. 結語

中央アジアでは1980年代末期よりイスラーム復興の動きが起こり、独立期に政治とイスラームとの間に新しい関係が生じたが、その状態は目下非常に不安定である。ウズベキスタンは独立後、経済と政治の変革にハードランディングをとらず、政情の安定をなによりも優先するソフトランディングをとった。その結果確かに政権は安定したが、民主主義も市場主義も実現されず、市民的権利のレベルはブレジネフ時代以下であるといわれ、豊かな天然ガス資源や大規模な綿花生産にも拘わらず経済も低迷している。しかも、外国援助や外資の導入、部分的私有化はカリモフ大統領に繋がる旧共産党ノーメンクラトゥーラの人々に富と権力を集中させた。ソ連時代、中央アジアやコーカサスの特徴であると党中央から批判された汚職と身内贔屓は一層拡大したものと考えられる。民主主義より政治の安定と経済発展を求めるいわゆる開発独裁は、インドネシアの例を見る限り一時的かつ表面的効果しか見られない。ウズベキスタンにおいても権威主義的政権による政情の表面的安定は、長期的には地域の安定的発展を妨げるものではないであろうか。更に時宜を失った遅すぎる自由選挙はアルジェリアのようにイスラーム政党の勝利をもたらすのではないであろうか。野党に政治参加を許さないシステムは将来の民主的政権交替のリスクを高めており、合法的政治活動に参加することを許されない在野の政党や有権者は別の形の政治行動を求めている。中央アジアにおけるイスラーム主義の趨勢はそれ自体ではなく、政府との関わりで変化してきたものであろうし、今後もそのように推移するであろう。

タジキスタン・イスラーム再生党は、イスラーム的政治を実現させるための目的を持つ政治結社として出発したが、内戦(1992-1997年)におけるカラテギン地方閥との関わり、またアフガニスタン・モジャーヘディンやターリバン政権との繋がりを経て、1997年の和平合意、そして現在では、世俗的国家の中の宗教に基づく議会主義政党として民主的手段によってその目的を実現させようとしている。 現在のところ議会内多数を得る可能性はなく、彼らの存在が合法である以上の成果をもたらしているとは言えないが、タジキスタンの民主化に占める重要性は高いと見られる。

タジキスタンでは世俗国家でありながらイスラーム政党の活動が許されているのに対して、ウズベキスタンは国家制度の自己規定においては、イスラーム的であることを主張しているものの、それはイスラームの文化的信仰的側面にだけ限定され、イスラーム政党は禁止され、議会内外に合法的代弁者を持たない。この結果、ウズベキスタンにおける政治的イスラームは、秘密裏に直接民衆に働きかけている。

ウズベキスタン・イスラーム運動は武力において旧共産党につながる現政権を打倒しようとする組織である。タジキスタン内戦期に武装勢力として登場し、内戦終了後はアフガニスタンに本部を設け、ターリバン政権とも密接に連携をとりながら、ウズベキスタン、タジキスタン、キルギスタンに跨るフェルガナ地方の山地でゲリラ活動を行なった。2001年には組織を発展的に解消し、新たにトルキスタン・イスラーム党を結成、活動地域を中央アジア全域に拡大したが、テロリズムに対する作戦下のアフガニスタンで壊滅的打撃を被り、2003年夏にはほとんど活動ができなかった。

現在イスラーム解放党は民族的国境に細分されない全イスラーム共同体を単一のカリフのもとに成立させる目標を持つ世界的規模の国際的政党で、平和的手段を標榜するが、議会政党として選挙に訴えて政権を獲得するという手続きをとらない。カリフ政権樹立までの具体的方法は未知であり、将来的展望も空想的であるが、ウズベキスタンでは実質的野党が存在しない中、唯一組織を展開する反政府勢力として、国民の不満を吸収し、それゆえに政府の厳しい弾圧を受けている。2003年ロシア政府は同党をテロリスト集団と認定したが、各国治安関係者の中には、ヨーロッパに置かれている同党本部の方針には言及しないまま、末端組織の過激化を示唆する者が存在する。

当事者、現地研究者・当局者、国際団体・機関々係者などの意見を集約するとウズベキスタンにおける宗教的過

激派跳梁の原因は、ソ連邦解体と新独立国家の成立に伴う社会状況、即ちイデオロギー的空白やイスラームに関する正しい知識の欠如、政治の腐敗・失業・貧困、経済システムや公衆道徳の混乱、および民主主義の未成熟等を掲げている。